

Title	特集：ベンガル社会経済史研究のフロンティア：植民地期を中心に：序
Sub Title	The frontier of the socio-economic history of colonial Bengal : preface
Author	神田, さやこ(Kanda, Sayako)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2016
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.109, No.3 (2016. 10) ,p.411(17)- 423(29)
JaLC DOI	10.14991/001.20161001-0017
Abstract	
Notes	特集：ベンガル社会経済史研究のフロンティア：植民地期を中心に
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20161001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集：ベンガル社会経済史研究のフロンティア ——植民地期を中心に——

神田さやこ*

1. コンファレンスの概要と本特集号について

2015 年 12 月 10～11 日の 2 日間にわたり、三田キャンパスにおいて、経済学会コンファレンス “International Conference: The Frontier of the Socio-Economic History of Bengal” が開催された。本コンファレンスでは、植民地期（18 世紀後半から 20 世紀前半）ベンガル社会経済史をテーマに、国内外からベンガル社会経済史研究者およびベンガル以外のアジア地域を研究対象とする研究者が集まり、活発な議論が展開された。なお、ベンガルとは、一般的にはバングラデシュとインド・西ベンガル州にまたがる地域を指す。ベンガルは、1947 年のインド・パキスタン分離独立によって東西に分断されたため、現在では国境で分断され、宗教的にも、ムスリムが大半を占めるバングラデシュとヒンドゥー教徒が多いインド・西ベンガル州という東西間の相違が強く認識される。しかし、ベンガルは、歴史的にベンガル語話者が多数を占める 1 つの地域として捉えられよう。

本コンファレンスの概要を振り返っておこう。第 1 セッション（「比較史のなかのベンガル」）では、コメンテーターにインドネシア史を専門とする太田淳氏（広島大学）を迎え、難波ちづる氏（慶應義塾大学）、筆者、小川道大氏（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員）が、ベンガルとの比較を視野に入れた報告をおこなった。難波報告（“French Indochina in the Post-world War II Period: Return of France to Indochina and Repatriation Issue of Vietnamese Workers”）は、第二次世界大戦後のインドシナにおけるフランスからのベトナム人労働者帰還問題について⁽¹⁾、神田報告（“Telugu Shippers and the Salt Market in Eastern India in the Early Nineteenth Century”）は、19 世紀前半における南インド・コロマンデル地方のテルグ商人のベンガルにおける活動につい

* 慶應義塾大学経済学部

(1) 本報告の内容は、難波ちづる「[「本国」から「祖国」へ——戦後フランスのインドシナ復帰と在仏ベトナム人労働者の送還問題——】『三田学会雑誌』108-2, 2015, 83-108 頁を参照。

(2) て、小川報告(“The Trade Network and the Market System at a Pargana Level in the Early Modern Western India”)は19世紀前半の西インドにおける市場システムと流通ネットワークについて検討したものであった。フランス、イギリス、オランダの移民政策の共通点と相違点、植民地期インドにおける東部、南部、西部の商人活動の共通点と相違点について、コメンテーターやフロアから多くの意見がだされた。

第2セッション(「17世紀～19世紀のベンガルにおける経済変容」)では3論文が報告された。ティロットマ・ムカジ(Tilottama Mukherjee)ジャダププル大学助教の報告(“Bengal in Seventeenth and Eighteenth-Century Accounts: Travel and Economy”)は、17世紀から18世紀にかけて書かれた数多くの旅行記をもとに当時のベンガル経済を旅や移動との関係から検討したものであった。谷口謙次氏(大阪市立大学・研究員)は19世紀前半の不況の要因を貨幣供給量との関係から明らかにし(“The Early 1800s Economic Depression and Supply of Money in India”),原孝一郎氏(東京大学文学部・教務補佐員)は19世紀後半から20世紀初頭におけるアヘン専売(財政)とアヘン貿易の結節点としてのカルカッタの機能について報告した(“The Role of Calcutta in the Supply Chain of Bengal Opium: Focusing on the Export System from 1870 to 1910”)。コメントには、インド史を主にヒト・モノの移動と消費の面から研究している大石高志氏(神戸市外国語大学)があたった。とくに、長期的なインド経済の特徴として考えられる開放性が指摘され、その植民地期における限界と可能性について議論がおこなわれた。本セッションで発表された論文は、すべて本特集号に所収されている。各論文の内容はそちらを参照されたい。

第3セッション(「植民地期後半を中心としたベンガル社会経済史」)は、ベンガル社会経済史研究の第一人者として長年研究を牽引してきたビノイ・チョウドゥリ(Binay Chaudhuri)カルカッタ大学元教授(以下、ビノイ教授)、植民地期ベンガルの宗教・社会史研究の専門家トゥリプティ・チョウドゥリ(Tripti Chaudhuri)ラビンドラ・バラティ大学元教授(以下、トゥリプティ教授)を迎えた基調講演のセッションであった。司会は、植民地期における開発と疫病との関係を中心にインド経済史研究をおこなっている脇村孝平氏(大阪市立大学)が担当した。いずれもベンガル社会経済史研究にとって重要な議論が織り込まれた講演であり、本特集号にも論文として掲載される予定であったが、残念ながら両教授の健康上の問題からそれを実現することはできなかった。両教授とも本誌への投稿を希望されているので、いずれその機会が来ることを企画者として願っている。とはいえ、この機会にベンガルや南アジア経済史に関心をもつ読者があらわれることを期待し、これら3報告

(2) 本報告は以下の論文として発表される。Sayako Kanda, “Competition or Collaboration? Importers of Salt, the East India Company, and the Salt Market in Eastern India, c. 1780–1836”, in Sanjukta Ghosh, Ezra D. Rashkow, and Upal Chakraborty (eds.), *Memory, Identity, and Colonial Encounter in India: Essays in Honour of Peter Robb* (London: Routledge, 2017, forthcoming).

の概要は次節で紹介することとする。

さて、ベンガル研究は、これまでも国境を越えておこなわれてきたが、多くの場合、分野ごとに進展してきた。こうした状況を打破すべく、近年、国境だけではなく、研究分野を横断した研究者のネットワークの構築が進められている。国際ベンガル学会（the International Congress on Bengal Studies）の開催はそうした試みの1つであろう。その第1回大会はニューデリーで、第2回大会はダカで、第3回大会はコルカタで開かれ、第4回大会は2015年12月に東京で開催された。インドとバングラデシュ以外の国での開催は初めてであり、いかに日本におけるベンガル研究が盛んであるかを物語っている。東京外国語大学で二日間にわたって開催された大会には、予想を大幅に超える参加者が集まり、その専門分野も経済、開発、歴史、文学、宗教、パフォーミング・アーツなど多岐にわたり、盛会に終わった。次回大会はふたたびバングラデシュで開催されることになっている。

日本で開催された背景には、日本でベンガル研究が盛んにおこなわれてきたことがある。経済史研究の分野では、これまで、高島稔・北海道大学名誉教授、中里成章・東京大学名誉教授、谷口晋吉・東京外国語大学特任教授、河合明宣・放送大学教授らを輩出してきた。植民地期における農業・農村・土地制度を中心テーマに、地方文書や行政文書を丹念に読み込んだ研究は、ベンガルでもよく知られ、高く評価されている。こうした研究成果をベースとして、筆者をはじめ本コンファレンスでの報告者の研究関心は、流通や金融といったモノ、カネ、ヒトの流れへと移行している。それは、われわれが研究をはじめた頃の経済史研究では、国家の枠組みを超えた流通や貿易に大きな関心が集まっていたからであろう。インドから参加したムカジ氏もその一人である。

ピノイ教授は、ベンガル経済史・農業史の大家であり、日本の研究者の多くが直接指導を受けたり、研究上のアドバイスを受けてきた。ピノイ教授は、圧倒的に大きいベンガルの農村社会と農民の生活に焦点をあてた研究をつづけてこられた。本コンファレンスに教授とコメンテーター諸氏にご参加いただいたことで、植民地期のベンガル経済史を、報告者の大半が研究対象とする流通にかたよらず、生産と消費を含めた経済の諸側面から議論することが可能になったことは、本コンファレンスの大きな成果であったといえる。⁽³⁾

ピノイ教授の研究は、植民地期におけるネイティヴやアボリジニーを意味するアーディヴァーシー（*adivasi*）の人々も含むものである。ベンガルは、いわゆるベンガル人、ヒンドゥー教徒、イスラーム教徒といった大分類に含まれるマジョリティのみならず、アーディヴァーシーや他地域からの移住者など多様な人々を抱える地域である。ヒト・モノ・カネが動く経済活動は、そもそもそうした分断を超えておこなわれるものであるので、本コンファレンスは、ベンガルが内包する多様性をどのように捉えることができるかを検討する好機であったようにも思われる。ピノイ教授の講演では、

(3) 工業を含めることができなかつたのが残念である。そこで、本特集号には、脱工業化論を再考する論稿を収録した。

植民地期におけるオデイバシの運動の変化を、とくに宗教という切り口からお話しただいた。また、それに密接に関連するテーマとして、トゥリプティ教授には、宗教史分野でのご講演を依頼した。その内容は、植民地期ベンガルで形成された新たな知識人層とプロテスタント^{ミッシヨナリー}宣教師団との相互作用から、新たな文化が形成されていく過程を繙いたものであった。経済史研究から宗教や思想を切り離して議論することはむずかしい。参加者にとっては改めてその重要性を認識する機会となったであろう。

2. 基調講演の概要

それでは、基調講演の概要を紹介しよう。なお、注は、とくに断りがないかぎり、必要に応じて筆者がつけたものである。概要であるので、本節の引用はお控え願いたい。

(1) 第1講演：Binay Chaudhuri, “India’s Rural Society Faces a New International Economy 1857–1935: Debate over its Long-Term Implications for the Society”⁽⁴⁾

第1講演は、ビノイ教授による、インド大反乱（以下、大反乱）から世界大恐慌の時期を対象に、「新たな世界経済」がインド農村社会に与えた長期的影響についてのものである。対象時期において、スエズ運河の開通に代表される交通・通信網の飛躍的な拡大や世界貿易の増大によって、ジュート・綿花・小麦などの新たなインド産品の世界市場での需要が喚起され、インド経済がそれまで以上に密接に世界市場と結びついた。

新たな世界経済がどのように農民や農村の経済に影響を与えたかという点において、主に2つの異なる研究動向が存在する。第1は、B. M. バーティヤー（Bhatia）に代表されるナショナリストの立場をとる研究であり、主として新しい世界経済が農村経済を疲弊させたと主張する⁽⁵⁾。バーティヤーの議論は以下のとおりである。交通・通信手段、貿易、工業の飛躍的な発展は革命ともいえるべきものであり、その革命には穀物を含む農産物価格の上昇もともなった。農産物価格の上昇は、通常なら農民の所得上昇につながるが、インドではそれは一部の富農に限定された。なぜなら、余剰穀物をもつ富農のみが、有利な農工間の交易条件を享受することができ、小規模・零細農民や農業労働者は価格上昇によって食料を得ることさえ困難になったからである。農村における食糧難の1つの要因は、農民も商人も市場メカニズムに反応して行動したことであった⁽⁶⁾。他方、新たな世界経済

(4) ビノイ教授の2つの基調講演に関連する研究として、Binay Bhushan Chaudhuri, *Peasant History of Late Pre-Colonial and Colonial India*, Project of History of Science, Philosophy and Culture in Indian Civilization, vol.VIII, part 2 (New Delhi: Centre for Studies in Civilization, 2008) を参照されたい。

(5) B. M. Bhatia, *Famines in India* (London: Asia Publishing House, 1963).

がインドの貿易品目構成を変化させ、その主要輸出品が農産物になったことも農村における食料不足の要因となった。農産物輸出の増加は、中高級穀物のみならず低級穀物の価格を上昇させ、それを食料とする貧農層、とりわけ賃金労働に依存する農業労働者に多大な影響を与えたのである。賃金も上昇したものの、そのペースは食料価格上昇のペースをはるかに下回った。

バーティヤーの研究には批判も多く出されている。しかし、教授は、バーティヤーが食料価格の上昇の影響が農民の階層によって異なっていたことを実証した点を高く評価している。

バーティヤーに対して、B. R. トムリンソン (Tomlinson) は、むしろ新しい世界経済の積極的な影響を指摘する⁽⁷⁾。トムリンソンは、1860年代から1920年代頃までの海外貿易を「新たな力」と呼び、それが圧倒的に強力な影響力を農村経済に対して継続的に発揮していたとする。その力は輸出品の構成に強くあらわれている。トムリンソンは、ベンガルのジュート、中央インドや北西部インドの小麦、ボンベイの綿花、マドラスの落花生をはじめ、世界市場で需要が増加した新しい輸作物が、農民の変化への順応によって、世界市場での継続的な需要を引きだしつづけたとする。インド農業は海外市場のネットワークと密接に結びつき、それは1930年代に崩壊するまでつづいた。

ピノイ教授は、トムリンソンの研究の問題点として、貿易の拡大の影響を過剰に評価している点を指摘している。なぜなら、新しい作物が、いずれも農民の土地で栽培され、農民自身が労働のほとんどとその他必要な資源の一部を提供して生産される「農民の作物」であり、それらに対する需要はトムリンソンが強調するほど安定的ではなかったからである。実際に、ボンベイの綿花ブームはアメリカ南北戦争終結後に、中央インドの小麦ブームは1890年代に去り、ジュート市場もきわめて不安定であった。

バーティヤーもトムリンソンも、経済の浮沈という視点から新たな世界経済が農村経済に与えた影響という問いに答えようとしているのに対して、ピノイ教授は、以下にみるように、農民の生産組織の長期的変化を検討する重要性を主張している。

大反乱以前からの「旧作物」⁽⁸⁾である藍は、基本的にヨーロッパ人の藍プランターが資金を融通し、生産過程を管理した。「前貸し」と呼ばれる、生産者に生産資金を貸しつけて作物を調達するという制度は、強制的に農民を藍作に向ける手段として機能した。しかしながら、ベンガルでは、1859-60年に起きた藍一揆により、藍作を農民に強制することがむずかしくなった。もともと、新たな生産拠点となったビハールでは、大反乱後の時期においても、合成藍との競争による価格低下、藍プラン

(6) 具体的には、需要に応じて売れるだけ売ってしまうという農民の行動が指摘されている。商人も高く売れる市場に穀物を移出してしまうため、農村に必要な食料が残されなかった。

(7) B. R. Tomlinson, *The Economy of Modern India 1860-1970* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).

(8) 旧作物とは、本講演の対象時期以前からの主要輸出品であった作物を指す。主たる作物は藍、アヘン原料であるケシである。旧作物に関する詳細は、Benoy Chowdhury, *Growth of Commercial Agriculture in Bengal, 1757-1900*, vol.1 (Calcutta: Indian Studies Past & Present, 1964).

ターへの負債を抱えた地主の存在、比較的狭い範囲への藍作地の集中が要因となって、強制的な栽培制度がつづいた。とはいえ、そのビハールにおいても1890年代には藍生産は衰退したのである。同じく「旧作物」であるケシは、政府の専売のもとで生産された。大反乱以降、中国市場でのアヘン需要低下によって政府の生産統制が大きくゆるみ、さらに農産物価格の上昇によって他作物との作付け競争が激化すると、政府はケシ作農民への支払い額を増加させざるをえなくなったのである。

対象的に、ジュート・綿花・小麦などの「新作物」の栽培では、より大きな変化が生じた。⁽⁹⁾これらの作物は先述したように「農民の作物」であった。また、その作付面積は「旧作物」に比してきわめて大きかった。作付面積が短期間に急速に広がったため、農民は需要に対応しながら生産組織を調整する必要に迫られた。綿花ブームや小麦ブームに代表されるように、需要が長くつかず、変動が激しかったことも、農民の生産組織を変化させる要因になった。農民にとって、一般的な調整手段は、他の作物への作付け転換であったが、それは大きな負担をともなった。

ジュート作の例をあげよう。通常、小商人がジュート作農民にヨーロッパ資本のジュート工場からの前貸し金を配り、工場向けのジュートを調達していたが、小規模の農民が広範囲にわたって存在するため、小商人が何らかの強制を強いることはできなかった。そのため、基本的にジュート価格の変動によってジュート作をつづけるか米作に転換するかを農民が判断していた。しかし、農産物価格の変動、とりわけ米価の下落が激しい時期（とくに世界恐慌期）には作付け転換ができず、農民はジュート工場からの前貸し金に運転資金を依存し、ジュート作をつづけざるをえなかった。しかも、農民のジュート工場へのジュート原料販売量は、市場価格ではなく、生産に一切関与しないジュート工場独自の価格決定方法で決められた。甘藷の場合も、甘藷作農民が受け取る価格は製糖工場が決める。その過程で有力な地主などを介在させることもあった。

このように新しい世界経済では、輸出用商品作物の構成だけではなく、農民経済が機能する環境も異なっていたのである。

(2) 第2講演: Tripti Chaudhuri, “Encounters of Cultures: An Alien Religious Group’s Response to Two Socio-Religious Movements in Late Nineteenth Century Bengal”

次に、ベンガル知識人層とプロテスタント宣教師団との相互作用から宗教・社会・文化の変化を論じたトゥリプティ教授の講演内容についてまとめておこう。まず、「文化」、「文化を概念化する際の主観論」、「諸文化の遭遇」、「異文化」という本講演で使用される4つの概念が定義される。文化とは、一般的に想定されているように、特定の国やグループの慣習、信仰、生活様式、社会組織を指す。「文化を概念化する際の主観論」とは、具体的には、ある特定のグループが新たな知的、倫理

(9) 対象時期の前半におけるベンガルに関しては、Binay Bhushan Chaudhuri, “Growth of Commercial Agriculture in Bengal, 1859–1885”, *Indian Economic and Social History Review*, vol.7, no.1 (1970); vol.7, no.2 (1970).

的影響を受けたときに、どのように自らの文化を理解し、それを再定義するのかという問いを指している。19世紀ベンガルの文化システムには、教育を受けたベンガル知識人層とプロテスタント宣教師団という2つの主役が存在した。ベンガル人知識階級が自らの文化を再定義する過程は、社会と宗教の再構築という努力をともなった。ベンガル知識人層の「キリスト教文化」理解および宣教師団のインド文化理解は、福音伝道に関する広範な課題にも大きく左右された。「諸文化の遭遇」は単にこの2つが共存しているわけではなく、両者の考えが摩擦を起し、結果的に論争が引き起こされる状態である。これは、ベンガル社会文化史においてきわめて特徴的な側面である。「ヨーロッパ的合理主義」への親近感と宣教師団によるインド文化批判は、ベンガル知識人層が自らの文化を再定義するために必要であった。教授は、キリスト教がインドでは非西洋の宗教でありつづけ、西洋の宗教という認識が植えつけられたのはヨーロッパ中心主義に立つ研究が支配的であったためであるとする立場⁽¹⁰⁾に批判的である。なぜなら、18世紀から19世紀にかけてベンガルで活動した宣教師団は、現地の人々が「迷信に侵されている」ため、福音伝道による改宗への導きこそを最重要課題と確信していたからだとしている。

宣教師団の活動は、19世紀イングランドにおける功利主義思想の普及と福音主義復興運動の拡大の直接的な結果であり、1830年代には、非キリスト教世界の救済はかれらにとって重大な関心事になっていた。国家もこれを支援した。かれらのインド文化に対する見方は「倫理的に真っ暗闇の地」という表現によく示されている。これは、イギリス東インド会社の取締役であった福音主義者チャールズ・グラント (Charles Grant) が述べたものである。こうした理解をもつ宣教師団がイギリス統治と相まって影響力をもつようになるなかで、ベンガル知識人層によるインド文化理解と再定義の動きが生じた。それらには1820年代末以降のブランモ教会^{シヨマジ} (ブラーフマ・サマージ) を中心とした動きとそれ以上に強力に展開された新ヒンドゥー運動 (1872-1900年) という2つの大きな動きがあげられる。

ブランモ運動は、ラムモホン・ラエ (ラーム・モーハン・ローイ) から始まったといえよう。⁽¹¹⁾ ラエはブランモ協会の前身となるブランモ・シヨバを1828年に設立した。ラエが強い影響を受けたのはヨーロッパ的合理主義であった。小論 “The Precept of Jesus, the Guide to Peace and Happiness” (1820) のタイトルに明らかにみられるように、ラエはキリストの教えを平和と幸福へ誘うものとし

(10) 教授は R. E. フライケンバーグ (Frykenberg) をあげている。Robert Eric Frykenberg, “Introduction: Dealing with Contested Definitions and Controversial Perspectives”, in Frykenberg, Robert Eric (ed.), *Christians and Missionaries in India: Cross-Cultural Communication since 1500* (Grand Rapids, Michigan and Cambridge: Wm B. Eerdmans Publishing Co., 2003), pp.1-32.

(11) 19世紀前半のベンガルの思想、宗教に関しては、例えば、竹内啓二『近代インド思想の源流：ラムモホン・ライの宗教・社会改革』(新評論, 1991年)；白田雅之『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』(東海大学出版会, 2011年)を参照されたい。

た。合理主義者として、キリストの「奇跡」を一切信じず、三位一体にも懐疑的であったが、スコットランド宣教師団の宣教師アレクザンダー・ダフ (Alexander Duff) の英語教育学校の設立など宣教師団の活動を援助することもあった。とはいえ、ブランモ運動に対する宣教師団の態度は冷淡であり、ラエの著書でさえも嘲笑し、攻撃した。

ラエが「原初の純正」ヒンドゥー教の復興のためにはキリスト教の教えを受容する立場をとったのに対して、デベンドロナト・タゴールは宗教に関しては「ナショナリスト」の立場であり、キリストの神性すら信用しなかった。タゴールの団体は 1842 年に多くの支持者を集めてブランモ協会に合流し、その立て直しをはかった。ブランモ運動に大きな変化が生じたのである。こうしたブランモ運動の転換に対して、ダフの著書 *India and Indian Mission* (1840) に端的にみられるように、宣教師団はインド文化・宗教に対する批判をますます強めたのである。タゴールらもダフの著作を徹底的に批判した。

1860 年代にはブランモ運動にさらなる新たな変化がみられた。ケショブチヨンドロ・シェン (ケーシャブ・チャンドラ・セーン) の登場である。シェンは、キリスト教の影響を強く受け、反ヒンドゥーを色濃く打ちだし、社会改革の必要性を強調した。シェンの 1860 年の “Jesus Christ, Europe and Asia” という講演では、インド人に対してキリストの倫理的教えに従うべきであることを訴えている。タゴールがカースト制度や正統的ヒンドゥー教の慣習を維持しつつ改革を目指したのに対して、シェンは、そうした制度そのものがインドの進歩を阻害しているとみなした。異カースト間の婚姻を認めた 1872 年の婚姻法の制定にシェンが尽力したことから、タゴールとシェンとの亀裂は一層深まった。宣教師団は、シェンの登場を歓迎し、シェンのカースト制度否定をキリスト教の勝利と捉えた。1872 年に北インドのイラーハーバードで開催されたプロテスタント系宣教師団集会では全員がシェンを称賛したのである。

しかし、シェンはしだいに社会改革に関心を失い、ヒンドゥー教、とりわけ⁽¹²⁾ ヴィシュノブ派の儀礼や実践に傾倒していった。それはブランモ主義とは異なるものであった。ブランモ運動のなかで、シェンは急速に求心力を失っていったのである。宣教師団にとってもシェンの変化は大きな打撃であった。最も許しがたかったのは、シェンの『新たな掟 (*Nava Bidhan*)』がキリストのそれと同じように神聖なものであるとする主張であった。*The Church Missionary Intelligencer* 誌は、この主張がインドの福音主義化にとってヒンドゥー教のわけのわからない迷信よりも大きな障碍であると指摘している。

同じ頃、組織的で集団的な運動が展開されはじめた。契機は 1872 年の婚姻法であった。この運動は、単にヒンドゥー教の婚姻やカーストといった制度に影響を与える法制度に対する抵抗ではなく、反ブランモの主導者ラジナラヨン・ボシュの「ヒンドゥー教の優越」という 1872 年の講演に

(12) ヴィシュヌ派。とくに聖人チョイトンノ (チャイタニヤ) の信奉者。

みられるように、ヒンドゥー教を宗教として主張する大胆な試みであった。もはや単なる改革者の運動や単なる宣教師団のインド文化・宗教感への反発ではなく、インドの歴史や文化を再定義する運動が展開されたのである。高名な作家ボンキムチョンドロ・チョットパダエは、数多くの著作のなかでヒンドゥー教の偉大さを説いた。宗教家スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、1893年にシカゴで開催された宗教者会議における演説で、新ヒンドゥー運動を洗練した形で伝え、世界中に大きなインパクトを与えた。⁽¹³⁾ ヴィヴェーカーナンダは、パトリオティズムこそが「宗教の生きた要素」であると説いた。

このように、新ヒンドゥー運動はしだいにナショナリストの性格を強め、インディアン・ネーションという概念が優先されはじめた。皮肉なことに、それまで運動を牽引してきた社会改革や文化の再生といった概念は影をひそめ、宗教はしだいに運動の先導者としての役割を終えたのである。

宣教師団にとってこの運動は脅威であったが、かれらは宗教に触発された運動と勘違いしつづけ、そこに芽生えていたナショナリスト的性格を見逃したのである。こうした流れのなかで、宣教師団は、個人に改宗を求めるよりも長期的に人々の心理に作用して潜在的な福音主義者を育む方針をとった。しかし、このようなユートピア的神学的理論は機能しなかった。なぜなら、高尚な理論をふりかざす宗教は、キリスト教であれ、ヒンドゥー教であれ、運動に参加した大衆には無関係であったからである。ナショナリズムが、いつまでもエリート主義的な再生ヒンドゥー教に歩調を合わせることもなかったのである。

(3) 第3講演：Binay Chaudhuri, “Transformation of Rural Protest Movements in the Adivasi World of Colonial Eastern India 1855–1930: Role in it of New Religious Sects”

ピノイ教授による2つ目の講演は、1855年から1930年におけるアーディヴァーシーのサンタル (Santhal)、ムンダ (Munda)、オラオン (Oraon)、ホー (Ho) といったオディバシが展開した農村地域における抵抗運動、とりわけサンタルの運動 (1855～1882年) を議論したものである。⁽¹⁴⁾ 具体的には、かれらの運動が植民地期にいかに変化したのかを分析し、それを通じて、特定の歴史的条件下における政治と宗教との関係の本質を読み解いている。ピノイ教授によれば、こうした問題意識での研究は、とりわけ中世ヨーロッパ史で進んでいるが、本講演で問題にしている「宗教」は、キリスト教教会のようにすでに確立した組織があるものではなく、「セクト」と呼んだ方が適当なものであり、むしろ新しいものでもあった。しかも、それは既存の宗教組織とは異なり、急進的な運動を弾圧する方向には向かわなかった。なお、セクトは、既存の確立した宗教に対する抵抗から生ま

(13) トゥリプティ教授は、ヴィヴェーカーナンダのもう1つの特徴として、すべての宗教が1つの神にたどり着くための方法であるとして諸宗教の融合も説いていることも指摘している。

(14) ここにあげられているオディバシの多くは、現在の西ベンガル州、ビハール州、ジャールカンド州、オディシャ州を中心としたインド東部に居住している。

れた信仰と定義されている。

サンタルは、元来北インドからビハールに移住し、その後、その多くがイギリス東インド会社による植民地統治が開始された18世紀後半から19世紀前半にかけてベンガルに移住した。植民地期には、ベンガル西部地域のサンタル・パルガナを中心とした地域に居住した。1855年に始まったサンタルの運動が急進的だったのは、それが何らかの不満の解決を目指す改革的なものではなく、植民地期下のサンタルの政体と経済の根本的な再構築を目的としていたからである。

Hul と呼ばれる1855年蜂起は、「千年至福イデオロギー」に触発された。それは、あらゆる他民族の支配から独立し、それがサンタルにもたらしたあらゆる悲劇からも自由なサンタル政体という完璧な世界を構築しようとするものである。その根幹には指導者たちが神と呼ぶ超自然が介入し、蜂起の成功に導くという信仰があった。神の介入によって、二人の指導者が選ばれ、かれらが神託を受けた。ただし、この蜂起が広汎な地域に及んだ背景には、かれらが有力者たちと次々に秘密裏に会い、この運動を展開していたからである。すなわち、何らかのセクトに導かれたわけではなかった。この蜂起は、政府の激しい弾圧によって鎮圧されたため、蜂起そのものが正しいことなのかという不安や疑念がコミュニティに蔓延しはじめた。

そうしたなかで、1875年以降、*Kherwar* と呼ばれる新しい運動が生まれた。その運動は、「集団的浄化」こそがサンタルを強くするというイデオロギーをもっていた。1855年蜂起の指導者らが、「浄化された心」がなかったため神託を実現できず戦場での戦いで負けたと告白していることから、大きな相違を見てとることができる。すなわち、1855年蜂起自体は失敗に終わったが、その記憶が新たな運動のイデオロギー形成で重要な役割を果たすことになったのである。

Kherwar 信仰には2つの特徴があった。第1に、サンタルという民族のアイデンティティが（これも「作られた」ものであるが）新たに形成されたことであった。*Kherwar* とは、過去の偉大なサンタル国家を意味する。独立したサンタル国家の建設は、こうして急進的な *Kherwar* イデオロギーに吸収されていったのである。第2に、*Kherwar* 信仰は精巧な「浄化」プログラムという新たな概念を有していた。浄化という概念は「宗教的覚醒」というイデオロギーから生まれ、それはまったく新しい急進的政治の根幹を成すようになった。*Kherwar* は、サンタル社会を弱体化させた要因とみなされた多様な神々と宗教実践の存在を否定し、古い組織である村長や村の聖職者を追い払った。「不浄な」習慣とみなされた古来の神々や精霊への信仰は棄却され、豚や家禽の飼育が禁止された。新たな「浄化された」生活様式はヒンドゥーの浄・不浄の概念の影響を強く受けたものであった。こうして浄化されたサンタルは排他的なセクトとなり、他のサンタルを不可触民とみなし、通婚することも、井戸や池を共有することもなくなったのである。両者の間には深い社会的な溝が生まれた。

Kherwar イデオロギーは、それ以前のサンタルの思想とは異なった。また、先述したように一度は一神教が *Kherwar* 信仰の軸となったが、運動が本格化する頃までには衰えた。なぜなら、サンタル居住地域で長く村々を回りながら活動していたヒンドゥー教ボイシュノブ派の導師らの説法に

強い影響を受けたからである。導師らは確立した宗教組織ではなく反体制的なセクトに属していた。下位カーストに属する導師らは、カーストの影響から自由な説法を通じて、人間の関係の基本がカーストではなく、愛情、平等、兄弟愛にあることを説いた。*Kherwar* の指導者たちは、導師から直接教えを受けた者 (*babajis*) と呼ばれ、積極的に新しい教えを広める役割をになったのである。

初代指導者の Bhagirath は、1874 年 7 月 24 日に開催された *Kherwar* 会議で運動計画を明らかにした。その会議ではボイシュノブ派導師による Bhagirath に対する「王への塗油」の儀式が執りおこなわれた。集まった信徒たちは供犠や祈りによって「新たな国家^{ラージ}の成功を祈願した」という。列席していたサンタル・パルガナ副長官は不適切で扇動的な言葉が飛び交っていたことを報告している。運動の第 2 段階では、さらに急進的な傾向が強まった。*Kherwar* サンタルは、政府が実施した個人を対象とした国勢調査を拒否したのである。

同時代の人々や後の研究者は、この運動を単なる社会運動や宗教運動となし、政治運動の様相を見逃しがちであるが、*Kherwar* はアイルランドの急進的なフェニアン主義に似た「社会主義的」運動であり、政治性を深く内包した宗教だったのである。

International Conference

The Frontier of the Socio-Economic History of Bengal

Date: 10–11th December 2015

Venue: Keio University, Mita Campus, Tokyo

Day1: Room B, Research Building

Day2: 5F, East Building

Host: Keio Economic Society and JSPS Grants-in-Aid for Scientific Research (*Foreign Trade, Internal Trade and Long-Term Price Movements in Colonial India*)

Organizer: Sayako Kanda (Keio University)

Programme

⟨Day1⟩

Session 1: Bengal in Comparative Perspectives

Chair: Tomoki Shimanishi (Toyo University)

16:05–16:55 “French Indochina in the Post-world War II Period: Return of France to Indochina and Repatriation Issue of Vietnamese Workers”

Chizuru Namba (Keio University)

16:55–17:45 “Telugu Shippers and the Salt Market in Eastern India in the Early Nineteenth Century”

Sayako Kanda

18:00–18:50 “The Trade Network and the Market System at a Pargana Level in the Early Modern Western India”

Michihiro Ogawa (The University of Tokyo)

18:50–19:30

Comment: Atsushi Ota (Hiroshima University)

⟨Day2⟩

Session 2: The Economic Transition in Bengal from the 17th to the 19th Century

Chair: Takeshi Nishimura (Kansai University)

10:45–11:35 “Bengal in Seventeenth and Eighteenth-Century Accounts: Travel and Economy”

- Tilottama Mukherjee (Jadavpur University)
- 11:35–12:25 “The Early 1800s Economic Depression and Supply of Money in India”
Kenji Taniguchi (Osaka City University)
- 13:25–14:15 “The Role of Calcutta in the Supply Chain of Bengal Opium: Focusing on
the Export System from 1870 to 1910”
Koichiro Hara (The University of Tokyo)
- 14:15–15:00
Comment: Takashi Oishi (Kobe City University of Foreign Studies)
- Session 3: Key Lectures (Socio-Economic History of Late Colonial Bengal)
Chair: Kohei Wakimura (Osaka City University)
- 15:15–16:15 “India’s Rural Society Faces a New International Economy 1857–1935: De-
bate over its Long-Term Implications for the Society”
Binay Chaudhuri (Former Professor, Calcutta University)
- 16:15–17:15 “Encounters of Cultures: An Alien Religious Group’s Response to Two
Socio-Religious Movements in Late Nineteenth Century Bengal”
Tripti Chaudhuri (Former Professor, Rabindra Bharati University)
- 17:30–18:30 “Transformation of Rural Protest Movements in the Adivasi World of Colo-
nial Eastern India 1855–1930: Role in It of New Religious Sects”
Binay Chaudhuri
- 18:30–19:00 General Discussion
Chair: Atsushi Ota